プレスリリース
（報道関係各位）

令和7年8月22日
企画部地域創造課

伊那市 地域ブランドスローガン「森といきる　伊那市」発表

長野県伊那市は、地域の誇りと暮らしの根幹を未来へつなぐブランドスローガン「森といきる　伊那市」を発表します。これは、多様な命が支え合い、恵みをもたらす森のように、市民が関わり合い、伊那らしさを語り、喜びを分かち合うまちを目指すものです。森とともに歩んできた歴史や文化、自然の恵みと知恵を活かし、多様性とつながりを大切にしていきます。今後、具体的な活動が展開していく際には、随時発表していきます。

1　ブランドスローガン　　森といきる 伊那市

2　ブランドパーパス　　森から生きる知恵を学び、伊那市の未来を築く。
自然や学びが育む文化や風土を、次の時代へつないでいく。

3　背景と目的

私たちは今、「豊かさとは何か」という問いを改めて見つめ直す時代にいます。都会への一極集中や海外依存が依然続くなかで、気候危機や環境汚染、経済格差といった社会の歪みはより深まっていくようにも感じます。その一つの答えとして、伊那市はブランドスローガン「森といきる　伊那市」を掲げます。これは自然と人の営みに根ざした、持続可能、そしてあたたかな生き方を未来へつなぐ宣言です。人口減少や価値観の多様化が進む今こそ、暮らしの根本を見つめ直し、地域の強みや魅力を再確認しながら、市民が誇れるまちを育んでいきます。

4　今後の取り組み（４つのアクション）

1．伝わる・つながる（認知や共感の拡大）
スローガン・ビジュアルの認知と共感を市内外で発信・拡大。地元メディア・HP/SNS など活用

2．　知る・はじめる（対話と気づきの場づくり）
対話の場を創出し、暮らしや仕事の中で、「森のような〇〇とは？」を考えたり、つないだりするきっかけづくり

3．学ぶ・ひろがる（実践と学びの場の増加、市民の共創と学びの循環）
市民・団体などによる大小さまざまな実践と学びの場を増やす

4．変わる・育む（市役所からの変化）
インナーブランディングや職員ワークショップを通して、「森といきる」を自分事とする

5　添付資料　あり

本件に関するお問い合わせ先

伊那市 INA-CITY
長野県伊那市　企画部　地域創造課　地域ブランド推進係
（課長）田中　久　（係長）浦野　真由美　（担当）髙橋　隆文、仲村　啓助
電　話：0265－78－4111（内線）2155
FAX：0265－74－1250　E-mail：jkz@inacity.jp

伊那市ブランドスローガン発表

伊那市は、森とともに歩んできた歴史と、そこから育まれた知恵や文化、そしてここで暮らす誇りを未来へつなぐため、ブランドスローガン「森といきる 伊那市」を掲げます。多様な命が支え合い、恵みをもたらす森のように、市民が関わり合い、“伊那らしさ”を語り、喜びを分かち合うまちを目指し、自然や人との対話から生まれるつながりを基盤に、伊那だからこそできる暮らしの環境を育てます。今回のブランドは、この地域の風土や歴史、そしてここで暮らしてきた人々の営みや想いの積み重ねに根ざし、伊那らしい価値を豊かに表現するものです。

2025 年 8 月 21 日

伊那市

森といきる 伊那市

私の小さな頃は、人と森や山との関りは濃密なものがありました。子どもにとっては、春の山菜取り、サワガニやカジカ取り。お盆になると仲間と連れ立って盆花を取りに行き、秋にはキノコやクリやアケビを採る楽しみがありました。大人には生活の場としての森と山の存在がありました。カラマツやヒノキの植樹と下草刈りや枝打ちをし、後世のために森を育てる。ガスや電気製品のない時代には、煮炊きや囲炉裏の薪の準備や、冬にはバラ炭を作りに山に入り、また集落の飲料水を賄う「水道」の維持管理など、四季を通じて山に入っていました。私の小さな頃の記憶は、たった５０年ほど前のことですが、人類にとってみれば、木の実を採り動物を狩っていた縄文・弥生の昔から今の時代まで、連綿と森とは繋がりがあり、何千年も森とともに生きてきた歴史があります。

森林の持つ機能は、二酸化炭素の吸収と酸素の供給（光合成）、飲料水・農業用水などの涵養、土砂災害の防止、建築用材の供給、木質バイオマスの原料供給、動物・植物・昆虫・鳥などの臥しどころなどと多様です。ミネラルの恵みも欠かせません。森がなければ農業はできません。森がなければ薪炭も水も得られませんでした。

また森や山は畏敬の場であり、神の依代として信仰の対象でもありました。人々と繋がる癒しの森であり、思索の森であり、精神の交感する森、多様性の森がありました。

１８世紀から１９世紀にかけて生きたフランスの政治家であり思想家の、フランソワ＝ルネ・ド・シャトーブリアンは、「文明の前に森林があり、文明の後に砂漠が残る」と言っています。これは森との繋がりは形而上への祈りとともに、すべての事象は森とともにあると理解できます。平易に言えば古来より森との繋がりは生活の端々にあり、このことを忘れた民族は、砂漠と言う不毛を生み出すことに繋がるのだと理解するのです。

新緑の頃、森で始まる躍動と生命の息吹を感じさせる瑞々しい緑。漆黒の森にいるときの静謐さと畏敬、艶やかな紅葉の後の落葉。雪に眠る森の佇まい。

森羅万象、すべてが森に繋がっているように「森といきる 伊那市」でありたいと願います。

２０２５年8月２１日

伊那市長　白鳥孝

ブランドロゴ

森といきる
伊那市

森といきる
伊那市

複数の「木」が形づくる「森」。それぞれに「人」の文字を重ね、森のようなコミュニティを表現しました。人と人との出会いが重なり合い、対話が生まれ、学びが育まれる。多様な個性が響き合い、豊かさへと循環していく。
〈関係し合うから、森になり、関係し合うから、まちになる〉森が教えてくれる知恵を道しるべに、この土地に根づく文化と風土を次の世代へ。伊那市の未来への想いを、このロゴに託しています。

ブランドパーパス

森から生きる知恵を学び、伊那市の未来を築く。
伊那の自然や学びが育む文化や風土を、次の時代へつないでいく。

ブランドメッセージ

関係し合うから、森になり、
関係し合うから、まちになる。

私たちの社会は、どこへ向かっているのだろう。
もう少し豊かにいきる道は、ないのだろうか。

様々な命が関係し合いながら、絶えず循環し、支え合う場所がある。
それは、**森**。

命の関わりが多様であるほど、森は豊かになる。私たちの暮らしもきっとそうだ。
様々な個性が関わり合うからこそ、まちは豊かになっていく。

森の命が、絶え間なく巡るように、想いや文化は受け継がれ、つづいていく。
森の命が、互いに支え合うように、私たちのつながりが、未来を強くする。

森といきる。
それは、森や自然界の命の営みから、畏敬の念を持って学びなおすこと。
そして、人と人、人と自然がつながる地域社会を次世代へつないでいくということ。

本当は森のように多様な私たちが、関係し合いながら共にいきるための願い。
それが、「**森といきる**」ということ。

背景と目的

私たちは今、「豊かさとは何か」という問いを改めて見つめ直す時代にいます。都会への一極集中や海外依存が依然続くなかで、気候危機や環境汚染、経済格差といった社会の歪みはより深まっていくようにも感じます。その一つの答えとして、伊那市はブランドスローガン「森といきる 伊那市」を掲げます。これは自然と人の営みに根ざした、持続可能で、そしてあたたかな生き方を未来へつなぐ宣言です。伊那市は、「50年の森林ビジョン」に基づく50年先を見据えた森の保全・活用や、「伊那から減らそうCO_2!!」運動など、息の長い地道な取り組みを続けてきました。人口減少や価値観の多様化が進む今こそ、暮らしの根本を見つめ直し、地域の強みや魅力を再確認しながら、市民が誇れるまちを育んでいきます。

森といきるとは

「森といきる」は、伊那市の暮らし方や生き方を考える“思考の道具”です。森は多様な命が静かに支え合い、つながり循環し、古くから人の営みや文化を育んできた場所。この姿にならい、自然と共に歩みながら、尊厳や自由が根付いた自分らしく生きられるまちを目指します。これは、市民や行政が「森のような福祉とは？」「森のような学びとは？」「森のような〇〇とは？」と考え、対話を重ねることで、特定の答えを導くのではなく、まるで森が相互作用により豊かになるように、様々な声や価値観が重なり合い豊かな関係性や地域を育みます。日々の暮らしの中で森を敬い、その恵みと知恵を次世代へとつなぎ、参加型でゆっくりと伊那ならではの着実なブランド形成を行います。

森のような思考

多様性、循環性、静かな力強さ、
有機性、調和、支え合い、継承

暮らしから生まれるブランド形成

日常の中で「森といきる」を体感し、
それを語れる人を増やす

対話と共創

立場を越えて問いを共有し、
答えを探し続ける場をつくる

地域の生命体としての進化

異なる価値観がゆるやかにつながり、
自律的に進化し続けるまちづくり

今後の取組【主な4つのアクション】

1. 伝わる・つながる（認知や共感の拡大）

スローガン・ビジュアルの認知と共感を市内外で発信・拡大。地元メディア・HP/SNSなど活用

2. 知る・はじめる（対話と気づきの場づくり）

対話の場を創出し、暮らしや仕事の中で、「森のような○○とは?」を考えたり、つないだりするきっかけづくり

3. 学ぶ・ひろがる（実践と学びの場の増加、市民の共創と学びの循環）

市民・団体などによる大小さまざまな実践と学びの場を増やす

4. 変わる・育む（市役所からの変化）

インナーブランディングや職員ワークショップを通して、「森といきる」を自分事化する

事業概要と経過

伊那市は、新しい地方経済・生活環境創生交付金（第 2 世代交付金）を活用し、令和 5 年度から 3 か年、地域ブランド推進事業を進めています。これは、独自に持つアイデンティティを明確にし、暮らしの豊かさを実感できるブランド形成により、伊那らしい魅力を作り上げるとともに、これらが市内外に認知・拡散・活用されることを目指すものです。

・令和 5 年度：アンケート・ヒアリング調査・分析、ワークショップ、地域資源の棚卸しなど
・令和 6 年度：ブランドスローガン方向性決定、職員向け説明会、推進体制準備、地域人材配置など
・令和 7 年度：スローガン発表、ブランド戦略策定及び実行・浸透、持続可能な仕組み構築など
3 か年事業費　予算額 44,250,000 円、2 か年分 決算額 24,923,536 円
※財源 新しい地方経済・生活環境創生交付金（第 2 世代交付金）50％、特別交付税 45％、伊那市負担 5％

本事業に関係する事業者及び地域人材

本事業には、市内外で活躍する多様な関係者が参画し、森のような学びや対話の浸透、インナーブランディングや人材開発、ライティング、アートディレクションなどを担って推進しています。

受託事業者：ユイット株式会社
宮下 幸子 氏（代表取締役 / ブランディングコンサルタント）

地域人材の皆様：平賀 研也 氏　（伊那市屋根のない博物館構想推進コーディネーター）
奥田 悠史 氏　（株式会社やまとわ取締役 / 森林ディレクター）
竹松 幸麿 氏　（株式会社エイピース代表取締役 / アートディレクター）
大塚 純 氏　（株式会社コエダス 代表取締役社長 / 組織開発コーチ）
玉木 美企子 氏　（トビラ舎 / 編集ライター）
平賀 裕子 氏　（ワイルドツリー代表、伊那市ミドリナ委員会副委員長）

伊那市ブランディングアドバイザー：
柘植 伊佐夫 氏（人物デザイナー、伊那市芸術文化大使、伊那市ミドリナ委員会委員長）

持続可能な伊那市の実現

日本の社会は、食糧やエネルギーの多くを海外に依存しています。大災害や国際情勢の変化によって、その供給が途絶えれば､暮らしや経済は一瞬で不安定になります。伊那市はこうした現状を踏まえ､まずは地方都市から｢食糧･水・エネルギーを自立的に確保できる社会」を築こうとしています。そのために、課題を洗い出し、実験と実装を繰り返しながら、行政だけでなく企業や大学とも協働し、持続可能な地域づくりを進めており､「安心して暮らし続けられる地方都市＝日本を支える地方都市・伊那市」の実現を目指しています。

長野県伊那市の特徴と優位点

- 豊かな自然と森林資源：市域の約8割が森林。四季折々の恵みを活かした暮らしや文化が息づく。
- 再生可能エネルギーの先進地：木質バイオマスや小水力発電などを活用し地域でのエネルギー自立を推進。ペレットストーブ普及率は全国トップクラス。小水力発電は長野県内最多。
- 移住人気の高さ：｢教育移住」のニーズが高く移住者が多い。移住・関係人口促進のマッチングサービス「SMOUT（スマウト）移住アワード2024」の人気移住先として伊那市が３年連続第１位！
- 特徴的な教育と保育：子ども主体の総合学習や、地域資源をいかした「やまほいく」などの実践。
- 国からの注目：森林活用や地域づくりの取組により、総理大臣や各省庁大臣、議員等が視察。
- 全国的評価：環境・課題解決、学び分野での受賞歴多数。持続可能な地域モデルとして注目。
- 新産業技術の導入：中山間地域等の移動・買い物・医療課題に対応する仕組みを実装。住民が心豊かに暮らすための手段の１つとして遠隔医療やＡＩ配車タクシーなど新産業技術を積極的に導入。

風土･環境

南アルプスと中央アルプスに抱かれ、市域の約83％（約550㎢）を森林が占める自然豊かな都市。四季折々の恵みを活かした暮らしや文化が息づく。

景観行政の推進

伊那市は、地域の良好な景観を守り、活かし、次世代へ引き継ぐため、2013年に伊那市景観条例が施行して景観行政団体となり､2014年に「伊那市景観計画」を策定した。条例による制度基盤と住民協働の両輪で､自然や町並み､田園、暮らしを調和させた美しい景観の保全・創出を進めている。市内12地区で運用される景観形成住民協定は、伊那市景観条例が施行される以前から認定され、住民が自主的に建物や広告物、緑化などのルールを定め、市と協定を結ぶ仕組みにより、歴史的景観や田園風景を守っているのも特徴的。

伊那市50年の森林（もり）ビジョン

2016年、伊那市は「ソーシャル・フォレストリー都市」を掲げ、50年先を見据えた「伊那市50年の森林ビジョン」を策定し、森林を単なる木材資源としてだけでなく、水源涵養・防災・CO_2吸収・文化・エネルギー資源など、地域の「自然資本」として捉え、長期的に価値を高めることを目指している。市民が主体的に関わる 伊那市ミドリナ委員会や、森林や木材を学ぶプログラム「フォレストカレッジ」を通じて、地域での森づくりや森林教育を推進。また、新宿区とのカーボンオフセット事業やフィンランド北カレリア地域との国際交流など、国内外のパートナーとも連携しながら、森を守り活かす取り組みを進めている。さらに、保育園や公民館、総合支所など公共施設の木質化を積極的に進めているとともに、市内の学校や庁舎、公民館などでは地元木材を活用した建築や内装を採用。森林資源の循環活用と地域経済への貢献を両立させる取組も展開している。こうした多面的な活動を通じ、「山（森林）が富と雇用を支える50年後の伊那市」の実現を目指している。

「伊那から減らそうCO_2!!」

伊那市は2016年から独自に「伊那から減らそうCO_2!!」計画を策定し、家庭の電力の再生可能エネルギー比率を2025年までに53％まで引き上げることを目標とし、2024年度時点で45％を達成。木質バイオマスや小水力発電の活用により、地域でのエネルギー自立を推進。これは、パリ協定をはじめとした世界的な温室効果ガス削減の流れを受け、地方からも「脱炭素社会」の実現を目指すもの。化石燃料に依存する社会から、自然と調和した暮らしにむけて、伊那市は持続可能な未来を切り拓く旗手として歩み始めている。

再生可能エネルギーのまち

伊那市の強みは、森林と水を活かした再生可能エネルギーの推進である。木質バイオマスを保育園・学校・温泉施設・老健施設で活用。ペレットストーブ普及率は全国トップクラス。

- 森林整備で伐り出した木材は、建材として活用するだけでなく、ペレットや薪として小中学校・保育園・福祉施設・温泉施設・農業施設のボイラーやストーブに利用。
- 急流河川を活用した小水力発電は、長野県内で最多を誇り、地域のエネルギーを賄っている。
- 公共施設や家庭での LED 化も進め、省エネ社会を推進。
- 木質バイオマスと水力を中心に、地域で循環するエネルギーの仕組みを築き、「再生可能エネルギー先進都市」として全国的に注目されている。

教育や保育・人づくり

地域や自然を教材に、子ども主体の学びを展開する総合学習や小規模特認校制度による地域全体で子どもを育てるなど、伊那らしい特徴的な教育が行われている。保育分野では、山や市街地の身近な地域の自然を活用した信州型自然保育「やまほいく」のほか、遊びの中から子どもの意欲や好奇心、地域住民との交流を育む「がるがるっ子」を実践。歴史的にも、江戸時代の寺子屋や藩校進徳館に象徴される学びの伝統を有し、郷土愛と自立心を育む教育文化が息づいている。

移住・定住（人気移住先ランキング３年連続第1位）

高まる地方移住の流れの中で、近年、子育て環境や特色ある教育を求める「教育移住」のニーズが高い。2015年の移住・定住の取組をはじめてから、子育て世代を中心に、これまでに700組、1,607人が実際に移住している。昨年度2024年度は、162組、358人が移住し、過去最多。
移住定住マッチングサイト「ＳＭＯＵＴ」において、約69,000人の一般ユーザーの関心が高かった人気移住先として、伊那市が3年連続第1位に選ばれている。伊那市の仕事や暮らしを体験できる「ふるさとワーキングホリデー」や移住体験ツアー・セミナー、空き家バンクの活用などを進め、移住者と地域住民が共に暮らしやすい環境を整備。

新産業技術の活用による地域課題解決

伊那市では、人口減少や高齢化、移動や買い物の困難など、地域が抱える課題に対応するため、新産業技術を積極的に導入。AI自動配車の「ぐるっとタクシー」(2017年導入)、ドローン物流の「ゆうあいマーケット」、遠隔医療の「モバイル・クリニック」などを実装。農業では自動給水栓や自動草刈り機、林業ではドローンや高性能林業機械を導入し、省力化を実現。これらは課題解決のための一手段であり、目的そのものではない。水や食糧、エネルギーはすべて森林の恵みに支えられており、私たちの暮らしの基盤は自然と深く結びついている。その循環を大切に、必要に応じてテクノロジーを取り入れることで、市民一人ひとりが安心して暮らし続けられる地域社会を目指している。

森と学びを軸としたフィンランド連携

2019年、フィンランド・北カレリア地域と林業・再生可能エネルギー・木材利用・バイオエコノミー分野で覚書を締結。森林を基盤とした国際的な知見交流を展開。さらに、2024 年からは多様な分野における森と学びを軸にしたフィンランド連携を推進し、駐日フィンランド大使との意見交換や、VTT フィンランド技術研究センター研究員来伊、VTT 主催フィンランド大使館晩餐会参加などフィンランド関係機関とのネットワーク強化を進めている。またヘルシンキ大学や信州大学、伊那市による大学間及び地域間連携も始まっている。覚書締結の中で、相互に視察訪問を実施。今年5月には、フィンランドでの社会や地域、暮らしとつながる実用的な学び、成長の基盤となる森から得られる学びや人材の育まれ方、環境配慮に対する意識の向け方、消費者の目線等）に重点を置くとともに、既につながりのある関係機関との意見交換や対話の場をもつ機会として、伊那市及び民間事業者等による訪問を行った。

多様な関係人口創出

伊那の森をテーマに、地域の仕事や暮らしを体験できる「伊那市版メタバース」を今年6月に公開。これを活用し、都市住民や国内外の人々が伊那市の自然・文化・学びに触れられる機会を創出。リアルとバーチャルを組み合わせた新しい形の「関係人口」づくりを進めている。

官民共創の新しいまちづくり

2024年9月「伊那市官民共創の新しいまちづくり協議会」が立ち上がり、市民と行政が一体となる取組がスタート。高校再編を契機に、市民・民間・行政が対話しながらまちの未来を共に描く仕組み。伊那北駅周辺や伊那市弥生ヶ丘高校の将来活用、中心市街地を含むまちなかエリアをテーマに議論が進められており、2025年1月のキックオフし、その後も数十名規模で継続的に「対話・つながり・実現の場」が開かれ、アイデアを具体的なまちづくりにつなげる取組が始まっている。

文化・芸術

高遠城の城下町としての歴史と風情を礎に、唱歌「ちょうちょう」の作曲者・伊澤修二、日本初の林学博士・中村弥六といった郷土の偉人を輩出。高遠石工の卓越した技術は、石仏や石垣に今も息づき、「日本で最も美しい村」連合に加盟する高遠町の景観美を支えている。東京芸術大学との連携による芸術文化の創造と継承にも力を注ぎ、歴史と未来が響き合う文化が融合している。

- 石造技術を伝える高遠石工。地域の景観と文化財に反映し、日本で最も美しい村連合に加盟。
- 桜の名所・高遠城址公園をはじめとする地域文化。
- 東京藝術大学との連携による音楽や美術などの活動を展開。
- 音楽教育の先駆者で、東京藝術大学の初代学長でもある伊澤修二や、近代林業の父として森林法の制定や林業教育に貢献した中村弥六など、郷土の偉人の精神を継承し、地域づくりや学びにいかす。

【本資料に関する問い合わせ】
伊那市企画部 地域創造課 地域ブランド推進係 浦野、仲村、髙橋
電話： 0265-78-4111（内線 2155）　mail: jkz@inacity.jp

伊那市公式ホームページ

森といきる
伊那市

森といきる
伊那市

森といきる
伊那市

森といきる 伊那市

森といきる
伊那市

森といきる 伊那市